

令和6年度

# 教育データ活用実証研究校 実施報告書

東京都教育委員会



## はじめに

社会の状況が大きく変化し、予測困難な時代においても、学校の学びにおいて、社会の変化に柔軟に対応し、「人」を育む教育の在り方を追求し、子供たちの学びを支えていくことが求められています。

国は「教育データの利活用に関する有識者会議」を継続的に開催するとともに令和4年1月に「教育データ利活用ロードマップ」を策定するなど、教育データの利活用はGIGAスクール構想による一人1台端末環境において、誰一人取り残すことなく、全ての子供たちの力を最大限に引き出すということがその目的であるとしています。

東京都教育委員会では、「知識習得型」から「価値創造・課題解決型」へ転換する「TOKYOスマート・スクール・プロジェクト」の推進に向け、令和6年4月から令和7年3月まで、令和6年度教育データ利活用実証研究校4校を指定し、実証研究を行いました。研究校では、都立高校等に導入されている「教育ダッシュボード」に蓄積されたデータや、その他の教育データを基に、教員間で話し合い、指導改善、授業改善について検討・実施し、その効果を把握しエビデンスを踏まえた指導について実践的研究を組織的に行いました。本研究でご尽力いただいた研究校に感謝申し上げます。

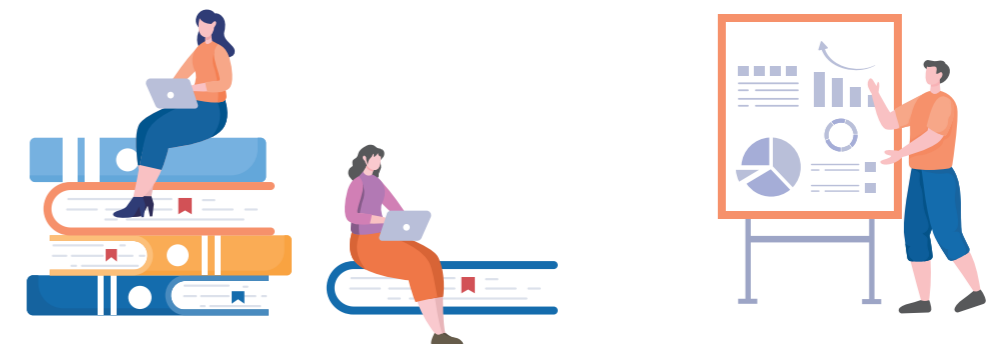
本報告書は、研究校で実践した取組から、教育データを活用した指導実践事例、組織的な取組とするための工夫、教育データ活用の成果と課題などをまとめたものです。各学校におかれましては、本報告書を参考にし、学習履歴や校務系データ等を活用した指導改善、授業改善等に組織的に取り組んでいただきますようお願いいたします。

今後、全都立高校等で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が実践され、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びが一体的に充実することを願っています。

令和7年6月 東京都教育委員会

## 目次

I 令和6年度教育データ利活用実証研究校の事業概要	P.4
II 東京都教育ダッシュボードの取組	P.6
III 教育データ利活用実証事例	P.10
IV 研究校における取組内容	P.28



# I 令和6年度教育データ活用実証研究校の事業概要

## 1 事業の目的等

令和6年度教育データ活用実証研究校(以下「研究校」という。)は、学習履歴や校務系データ等の指導等への利活用推進及び東京都教育ダッシュボード(※)で取扱うデータの充実に向けて、学校が保有する教育データ(定期考査の採点データや模擬試験の結果等)や生徒の学習状況等に係るアンケート結果を東京都教育ダッシュボードのデータと掛け合わせて分析し、学習指導・生徒指導における有用性等を研究する。

また、委員会が開催する連絡会等への参加及び全都立高等学校等への成果普及に向けた取組を行う。

※様々な教育データ(校務系・学習系データ等)を一つの画面にまとめて、グラフや表などで可視化、生徒指導や教育施策立案などに生かす。

## 2 研究体制等

### (1) 研究の体制

東京都教育委員会は、研究校が学習履歴や校務系データ等の蓄積・分析・指導等への活用における実証研究を推進するため、以下のとおり取り組んだ。

- ① 年3回の指導主事訪問で、各校の取組について指導・助言を実施した。
- ② 研究校の取組を促進させるために、データ活用に関する校内研修等の支援、データを活用した授業改善の支援、データの分析手法の支援等について、外部有識者を交えて実施した。

研究校では、エビデンスに基づく生徒への指導等を推進し、組織的な取組とするため、校内分掌を再編成して教育ダッシュボードの運用や校内研修を業務に位置付けた定期的な校内研修の実施や、プロジェクトチームを組織して教育データを利活用した授業改善や作問改善について検討・実践・振り返りを行い、校内で情報共有を実施した。

研究校(4校)			
都立八潮高等学校	都立三鷹中等教育学校	都立永山高等学校	都立日野高等学校

### (2) スケジュール等

実施期間は、令和6年4月から令和7年3月の期間において研究を行った。



また、次のとおり成果報告会を実施し、研究校での取組について、都立高等学校等へ展開した。

## 3 成果の発表等

### (1) 報告会の実施

令和6年度教育データ活用実証研究校成果報告会を、令和7年3月18日(火)に実施した。都立高等学校、都立中等教育学校、都立附属中学校及び都立附属小学校の教員が参加した。報告内容は、次のとおりである。

- ・ 令和6年度教育データ活用実証研究校の取組について
- ・ 学習履歴や校務系データ等の活用についての成果報告

#### 【都立八潮高等学校】

多様な生徒に対応するために、データを基に生徒の状況を詳細に把握し授業改善を実践した事例や、データから学校の課題を解決するために指導改善案を検討した事例を紹介した。

#### 【都立三鷹中等教育学校】

これまでに実施した生活指導について、データを基に効果や課題を考察し、より生徒に伝わる指導方法を検討した事例や、面談において校務情報と生徒情報を基によりきめ細かな支援を実践した事例を紹介した。

#### 【都立永山高等学校】

教育データの活用に向けて、授業でのICT活用についての組織的な取組や、教科会議・学年会議においてデータを基に情報共有・指導改善を実践した事例を紹介した。

#### 【都立日野高等学校】

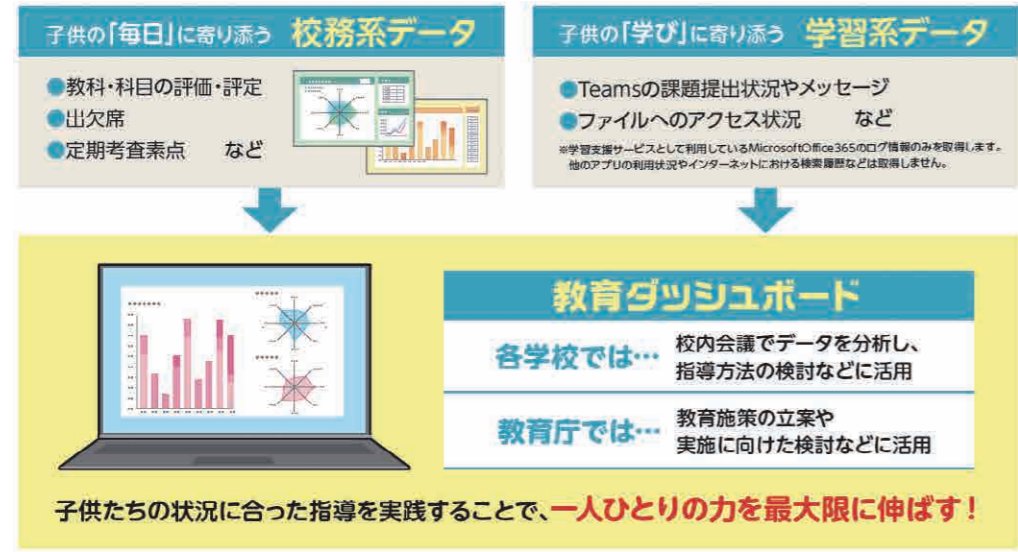
教員の経験と感覚だけではなく、学習履歴や出欠席等のデータを参考にした会議を組織的に行い、授業改善や生徒の状況に応じた生徒支援を実践した事例を紹介した。

## 東京都教育ダッシュボードの取組

### 1 東京都教育ダッシュボードとは

「学習データ (Microsoft Office 365の利用状況)」や「校務データ (成績・出欠席等)」などの「教育データ」を集約・可視化し、分析を行う教員・教育委員会用のシステムである。

教員の経験に加えて、データに基づく指導を実現することで、子供たち一人ひとりの力を最大限伸ばしていくことを目的としている。



### 2 画面例

#### (1) 校務系データ

<学校教員用「講座別欠課等アラート」画面>

**POINT**  
この講座は(換算後)欠課数が11回以上の生徒3名について注視すべきであることが分かります。

**POINT**  
欠課等アラートからこの講座には声掛けが必要な生徒が1名いることが分かります。

#### <学校教員用「講座別欠課等アラート」画面>

**POINT**  
注視が必要なクラスを確認することができます。

#### <学校教員用「評定」画面>

**POINT**  
1-4の講座について着目すると、他の講座に比べて評定が「4」の生徒が少ないことが分かります。

(2) 学習系データ

<学校教員用「Teams課題状況一覧」画面>

**POINT**  
提出期限が過ぎているが、2割の生徒が提出していない課題があることが分かります。

**POINT**  
ステータスの状態から課題の提出ができていない生徒を確認できます。

<学校教員用「Teamsファイル利用状況」画面>

ファイルの閲覧数や編集数などの利用状況を確認します。

<学校教員用「生徒別活動状況」画面>

各生徒の当該講座での取り組み状況を確認します。

3

- (1) 児童・生徒の個人データを見ることができるのは在籍学校の教職員のみとし、教育庁では個人を特定できる形でデータを見ることができないよう制限されている。
- (2) 教育ダッシュボードでのデータ分析を望まない児童・生徒については、分析対象にしない仕組みとなっている。
- (3) 教育ダッシュボードで取得する情報の種類や利用目的等は「東京都教育ダッシュボードにおける教育データ取扱い方針」として公開している。

### III 教育データ活用実証事例

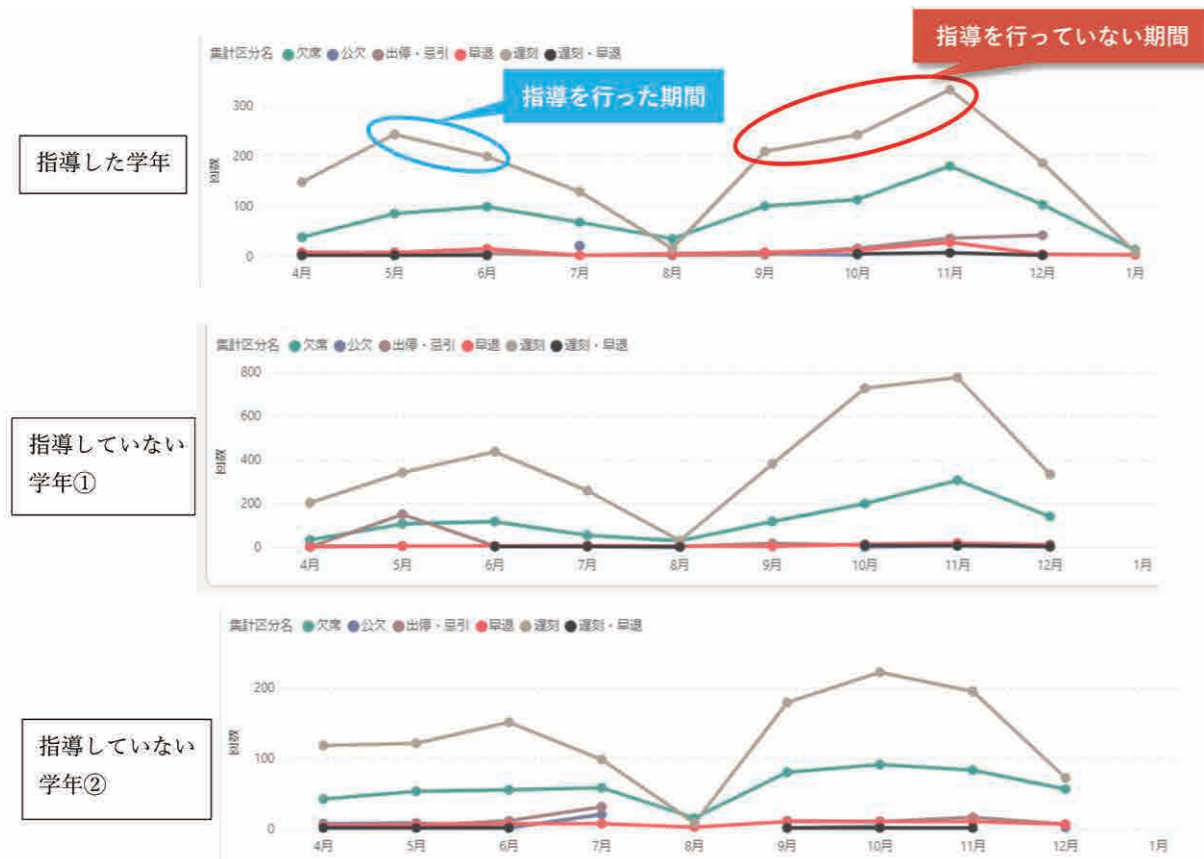
#### <実践事例①>

本校は毎年6月頃から遅刻する生徒が多くなるという傾向があるため、5月から6月まで生活習慣に関する指導を重点的に行った。その指導の効果についてデータを基に確認・分析し、更なる指導の改善について学年会議で検討した。

#### <実践内容>

教育ダッシュボードの「欠席等の推移」画面から月別の遅刻数の推移を確認して、教員が実践した生徒指導の効果を確認・分析した。具体的には、5月から6月まで重点的に生活習慣に関する指導を行った学年と、同時期に指導を行っていない学年の遅刻数を比較することで、指導を行った学年の方が遅刻数が減少していることが分かり、指導の効果を確認できた。

しかし、夏季休業後の9月以降は再度遅刻数が増加していることも確認できた。



※ 1月時点の推移のため、1月以降は表示されていない。

このことから、実践した指導は一定の効果があるが、その効果は一時的なものであり、生徒に指導内容の本質は伝わっていない可能性があることが分かった。

それを踏まえて学年会議では、今後どのように指導をしたら生徒に本質が伝わり、生徒の行動変容を促すことができるようになるのかを検討することができた。

#### <本事例の成果>

これまでの、遅刻数等の推移を把握するためには、クラス・学年・学校全体と手作業で集計を行う必要があり手間がかかることから、年間を通して指導の結果をデータで継続確認することが難しかった。

本事例では、教育ダッシュボードを活用することで、教員が実践した指導の効果を詳細なデータで確認するとともに、年間を通じた遅刻数等の推移を容易に確認することが可能になり、効果が継続する指導改善についての案を検討することができた。



III 教育データ活用実証事例

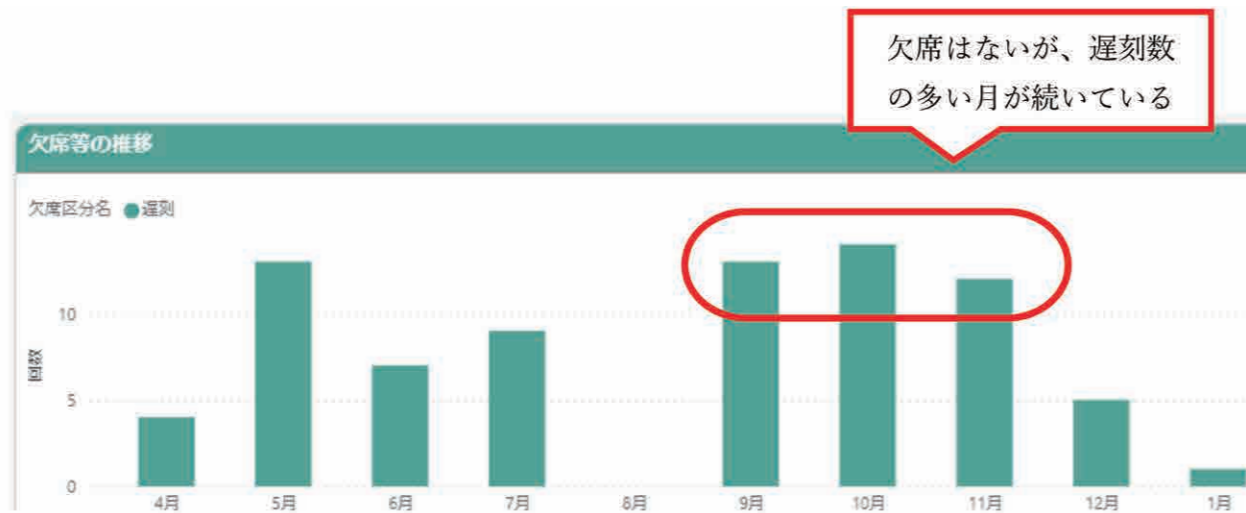
<実践事例②>

教員と生徒との二者面談を実施するに当たり、遅刻数や欠席数などの学校生活に関するデータと、Teamsを活用した課題取組状況等のデータを事前に確認することで生徒の生活や学習状況を把握し、面談では把握した情報を踏まえて生徒に合ったきめ細かな支援を行った。

<実践内容>

教育ダッシュボードの「生徒カルテ」画面で面談を実施する生徒の欠席等の推移を確認した。データから、この生徒は、欠席は無いが遅刻が多く、9月から11月までは毎月10日以上遅刻をしていることが分かった。

【遅刻等の推移】



生徒が遅刻をしてしまう要因として、各教科の宿題が比較的多い本校では、日々の課題を深夜まで行っている可能性が考えられる。当該生徒について、Teamsの操作状況を教育ダッシュボードの「曜日・時間別活動状況」画面で確認したところ、深夜まで課題に取り組んでいる状況ではないことが分かった。

そこで、Teamsを活用した課題の提出状況を確認したところ、生徒全体の課題提出率が高い課題であっても、「取り組み中」となっていることが分かった。

【Teams課題提出状況】

課題名	講座名	作成日時	提出期限	ステータス	提出日時	課題提出率
	情報 I (C)			取り組み中		86.11%
	情報 I (C)			取り組み中		75.00%
	情報 I (C)			取り組み中		94.44%
	情報 I (C)			取り組み中		94.44%
	言語文化(C)			返却済み		100.00%
	歴史総合(C)			取り組み中		75.00%

※課題提出率 = (課題を提出した人数) / (講座受講人数) × 100

このことから、遅刻数の増加は課題とは別の原因である可能性があること、課題に対して上手く取り組めておらず、学習上の困りごとを抱えている可能性があることから、二者面談では以下の2点について話し合いを行った。

- ・遅刻の原因と対策を一緒に考える  
⇒朝の支度に時間がかかることが遅刻の原因であることが分かり、どうすれば改善できるかを一緒に考え、朝の支度に関するチェックシートを一緒に作成した。
- ・学習について困っていることを聞く  
⇒授業についていけず、どこから学習すればよいか分からない状態であることが分かったため、該当科目の補習を行うことにした。  
さらに、遅刻は多いが欠席は全くしていないことを本人に伝え、前向きなフィードバックも行った。

<本事例の成果>

出欠状況と学習状況という2つのデータを基に生徒の状況を把握することで、生徒の困り感を予測し、面談を通じて生徒の状況に合ったきめ細かな支援を行うことができた。

これまでは、出欠状況などの校務系データは統合型校務支援システムで確認し、課題提出などの学習系データはTeamsでそれぞれ確認する必要があり、複数のデータを統合した分析は困難であったが、教育ダッシュボードを活用することで、校務系データと学習系データをシームレスに一元的に確認することが可能となり、より詳細に生徒の状況を把握し、支援を行うことができるようになった。

III 教育データ活用実証事例

<実践事例③>

学習や学校生活などに不安を持つ生徒に対する支援方法を検討する「総合生徒支援委員会」で都立学校版コンディションレポートと教育ダッシュボードのデータを活用し、支援が必要な生徒がどのような傾向にあり、どのような支援が効果的なのかを検討した。

<実践内容>

都立学校版コンディションレポートでは、生徒が困りごとや支援の必要性を感じた際に、教員に対して相談したい旨を発信するアラート機能がある。「総合生徒支援委員会」ではシステムに蓄積された過去のデータをもとにアラートを発信したことがある生徒を洗い出し、それらの生徒について、教育ダッシュボードでTeamsの課題提出状況やTeamsの曜日・時間別活動状況を確認し、家庭学習等の状況を把握した。

この結果、ある生徒は学校においては学習状況も生活状況も非常に安定しているように見えたが、Teamsの課題提出時間が常に「0時～4時」で推移していることが読み取れた。学校生活だけを見ていた際には特に問題や不安を抱えていることが分からなかったが、都立学校版コンディションレポートのアラートデータと教育ダッシュボードの情報を分析することによって、家庭で課題に取り組むために睡眠時間を削っている可能性や、学校の学習に対して不安感をもっている可能性があることが分かった。

このことから、この生徒に対しては、学級担任だけでなく教科担任からもこまめに声掛けを行い、生徒が相談しやすい環境を整えるという対応を取った。

【生徒A】

O365 利用状況									
曜日・時間別活動状況									
チーム別活動状況									
時間別活動状況の推移									
日付別活動状況									
曜日・時間別活動状況									
時刻	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	合計	
00時～04時	6	1	3	1	1	3	1	16	学校外での活動状況
04時～08時	5	5	6	2		7	1	26	
08時～12時	1	6	49		59	35	4	154	
12時～16時	11	13	25	5	20	26	1	101	
16時～20時	1	13	11	7	2	9	2	45	
20時～24時		20	60	26	8	32	23	169	
合計	24	58	154	41	90	112	32	511	

※表内の数字は曜日・時間帯別のTeams操作回数合計(累積)

<本事例の成果>

教育ダッシュボードを活用して学校外での課題取組状況を確認することで、学校での様子だけでは把握できなかった生徒の生活習慣の乱れや学習不安の可能性を把握することが可能になった。

これまで、成績が良い生徒でも急に登校できなくなったり、突然転学してしまったりする生徒が一定数いたが、生徒の学校外での課題取組状況等を確認することで、支援が必要な生徒や、不登校の予兆等を早期発見して、重点的に支援することが可能になった。

<実践事例④>

教科会議において、定期考査の得点や課題の提出状況など様々なデータを分析することで、エビデンスに基づいた効果的な授業改善案や指導改善案の検討を行った。

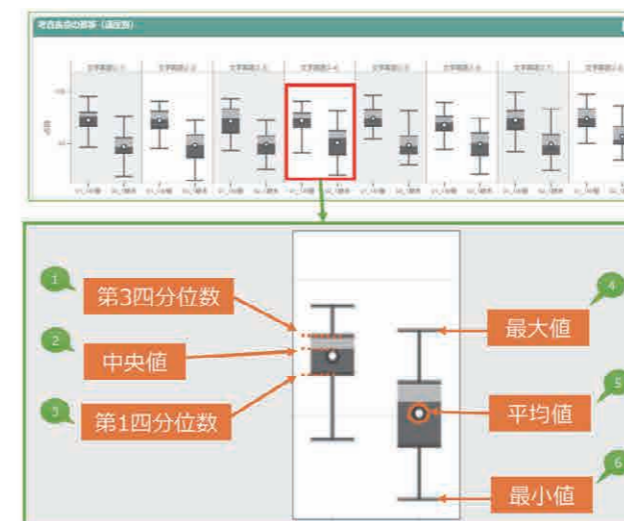
<実践内容>

教科会議で、当該科目について、学年全体の考査素点の傾向を把握するために、教育ダッシュボードの「考査素点の分布」を確認した。次に「考査素点の推移」画面から講座(クラス)別の推移を箱ひげ図で確認するとともに、講座(クラス)ごとの傾向を把握し、講座(クラス)ごとの傾向に合わせた授業改善案と指導改善案を授業担当者間で検討した。

分析例①では、1つの講座(クラス)内において生徒の理解度の差が大きいことが読み取れたため、当該講座(クラス)の生徒全員に対して試験範囲の復習をすることを計画した。

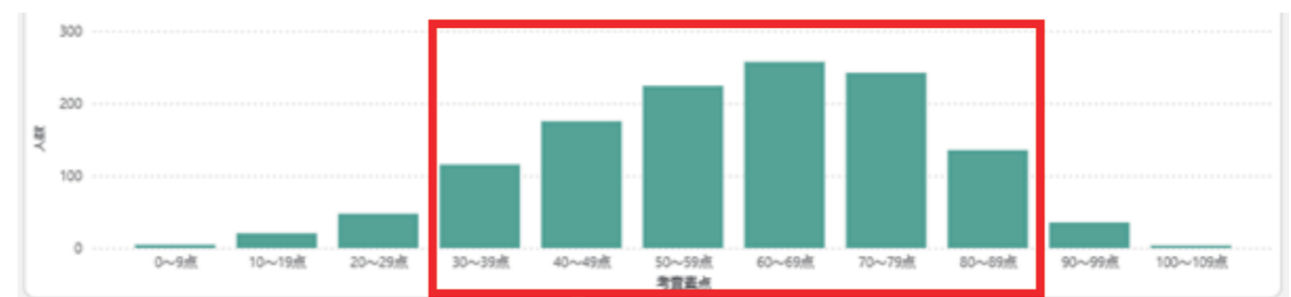
分析例②では、特定の生徒のみが学習内容を理解しきれていない可能性のあることが読み取れたため、支援が必要な生徒を特定し、個別に生徒に合った復習指導支援を計画した。

【箱ひげ図とは】



No.	項目	項目の説明
①	第3四分位数	データを小さい順に並び替えた時、データの数で4等分した時の区切り値75%の値。
②	中央値	データを小さい順に並び替えた時、データの数で4等分した時の区切り値が50%の値。平均値とは異なる。
③	第1四分位数	データを小さい順に並び替えた時、データの数で4等分した時の区切り値25%の値。
④	最大値	最も高い値。
⑤	平均値	データを全て加算し、データの数で割ったもの。中央値とは異なる。
⑥	最小値	最も低い値。

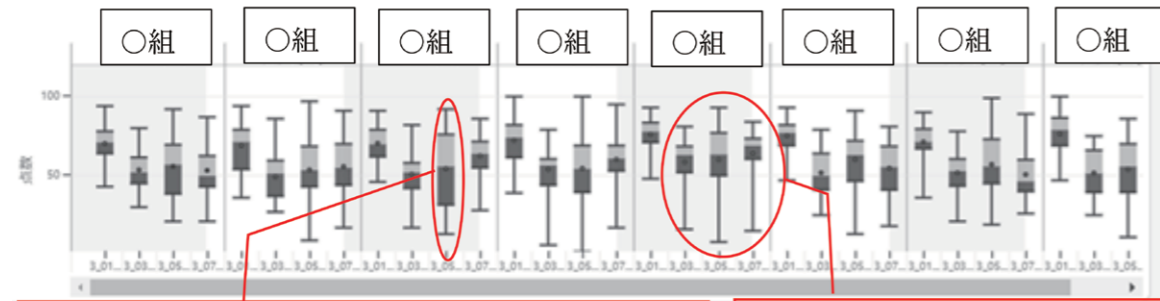
【考査素点の分布】



30点から89点までに分布する生徒が多く、29点以下及び90点以上の生徒が少ないことがわかる。

III 教育データ活用実証事例

【考查素点の推移】



分析例①

第1四分位から第3四分位までの間が広いことから、生徒の理解度の差が大きいことがわかる。

分析例②

最大値・第1四分位・第3四分位までの間が狭いので、理解度の差は少ないが最小値が第3四分位から離れているので、特定の生徒のみが、学習内容を理解できていない可能性がある。

<本事例の成果>

教科会議にて、教育ダッシュボードを活用することで、クラス全体へ復習指導をするのか、特定の生徒のみ復習指導をするのかなど、クラスの状態に応じた効果的な指導改善を実施できるようになった。

また、授業担当者だけでなく、教科の全教員で生徒の傾向を把握し、授業改善案や指導改善案を検討することで、授業担当者の感覚だけではなく、教員の経験とデータ分析による客観的な状況把握の両方を踏まえた改善案を検討することができた。



III 教育データ活用実証事例

<実践事例⑤>

教科会議にて、クラスごとにTeams課題への取組状況と定期考査の得点分布を確認しながら、エビデンスに基づく指導改善案の検討を行った。

<実践内容>

各教科で課題の配信をTeamsで行うようにし、教育ダッシュボードで生徒の活動状況や課題の取組状況を把握できるようにした。

教科会議において、クラスごとに生徒の活動状況や課題の取組状況と定期考査の得点分布の相関関係を分析したところ、チーム内のファイルをより多く閲覧したりチーム内でより多くのメッセージのやり取りをしたりしながら課題に取り組んだクラスの方が、そうでないクラスと比べて定期考査の平均点が高いことが分かった。

この結果を基に教科会議で話し合い、協働的な学習の機会を多く設定するよう、授業のやり方や課題の出し方を改善するよう検討を行った。

※以下、赤枠、青枠、緑枠のクラスを参照

【課題の取組状況】

学科	部	教科名	科目名	講座名	全操作	ファイル操作	メッセージ操作	課題操作
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-2)	4574	2927	234	1413
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-3)	4130	2601	90	1439
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-5)	4023	2462	18	1543
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-6)	3849	2584	2	1263
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-1)	2818	1953	6	859
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-8)	2736	1797	125	814
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-4)	2244	1461	10	773
普通科	未登録	国語	現代の国語	現代の国語(1-7)	1543	896	4	643
合計					25917	16681	489	8747

- ・課題操作：当該チーム内においてTeamsで課された課題を提出した数
- ・メッセージ操作：当該チーム内においてメッセージの投稿、リアクションをした数
- ・ファイル操作：当該チーム内において共有しているファイル进行操作(閲覧、ダウンロード等)した数
- ・全操作：「課題操作」、「メッセージ操作」、「ファイル操作」の合計数

【定期考査得点】

講座名	受験者数	平均点	最高点	第3四分位数	中央値	第1四分位数	最低点	標準偏差
現代の国語(1-1)								
3_04_2学期期末	37	49.9	84	58.0	47.0	41.0	29	13.4
現代の国語(1-2)								
3_04_2学期期末	40	54.5	83	61.3	55.5	46.0	35	10.7
現代の国語(1-3)								
3_04_2学期期末	39	50.2	74	55.0	48.0	43.0	36	10.0
現代の国語(1-4)								
3_04_2学期期末	38	46.4	79	61.8	41.0	36.0	15	15.9
現代の国語(1-5)								
3_04_2学期期末	39	52.3	83	61.0	53.0	42.5	31	13.5
現代の国語(1-6)								
3_04_2学期期末	39	49.9	78	58.5	48.0	42.0	25	12.7
現代の国語(1-7)								
3_04_2学期期末	37	46.4	87	54.0	43.0	36.0	26	13.7
現代の国語(1-8)								
3_04_2学期期末	39	48.4	73	57.5	48.0	41.0	15	12.1

<本事例の成果>

これまで指導改善の検討は教員の経験や感覚に頼る場合が多く、またTeamsで課題を配信しても教員は生徒の提出状況を確認するだけであったが、教育ダッシュボードで閲覧できる詳細な各種データを活用して分析をすることで、これまでは分からなかった生徒の課題への取り組み方と定期考査の得点の関係が明らかになり、エビデンスに基づく指導改善の検討につなげることができた。

III

教育データ活用実証事例

III 教育データ活用実証事例

<実践事例⑥>

面談の事前準備として、生徒の学習状況と評価・評定を確認し、それらを掛け合わせた分析内容を参考とすることで、各生徒の状況に合わせた個別最適な指導・支援を行った。

<実践内容>

教育ダッシュボードを活用して、生徒ごとにTeamsを活用した学習時間のデータを確認し、自宅での学習時間と評価・評定の相関関係を分析したところ、自宅での学習時間がほとんど無い生徒や、自宅での学習時間が十分取れているにもかかわらず成績に結びついていない生徒など、様々なパターンがあることが分かった。

面談では分析結果をもとに、自宅学習の時間が取れていない生徒には自宅での学習習慣を身に付けるためのアドバイスをし、自宅学習の時間が取れているにもかかわらず成績に結びついていない生徒には学習方法についてのアドバイスをするなど、それぞれのパターンに合わせた指導・支援が行えた。

【教育ダッシュボード\_クラス\_学習系】

生徒A

組 評定平均 3.1

指導内容  
ある程度十分な学習時間がある。努力が成果に結びついていない可能性がある。勉強方法について確認及び助言。

時間帯  
0時～6時  
6時～12時  
12時～18時  
18時～24時  
0時～6時(平均操作回数)  
6時～12時(平均操作回数)  
12時～18時(平均操作回数)  
18時～24時(平均操作回数)

生徒Aは、学習時間は十分とれているが評定平均は3.1なので努力が成果に結びついていない可能性があり、面談で学習方法について重点的に話をした。

生徒B

組 評定平均 3.0

指導内容  
自宅学習時間皆無。まずは学習習慣と勉強時間の増加を指導。

時間帯  
0時～6時  
6時～12時  
12時～18時  
18時～24時  
0時～6時(平均操作回数)  
6時～12時(平均操作回数)  
12時～18時(平均操作回数)  
18時～24時(平均操作回数)

生徒Bは、自宅学習時間がほとんどないので、面談で学習習慣について重点的に話をした。

生徒C

組 評定平均 4.5

指導内容  
自宅での学習の十分な取り組みを評価。継続的な取り組みを促す。

時間帯  
0時～6時  
6時～12時  
12時～18時  
18時～24時  
0時～6時(平均操作回数)  
6時～12時(平均操作回数)  
12時～18時(平均操作回数)  
18時～24時(平均操作回数)

生徒Cは、学習時間が十分にあり、評定に結びついているので、面談では継続的な取組を促すように話をした。

<本事例の成果>

教育ダッシュボードを活用することで、今まで把握できなかった自宅でのTeamsを活用した学習状況を生徒ごとに可視化することができるようになった。さらに他のデータと掛け合わせて分析をすることで生徒個々が抱える課題をより正確に把握できるようになった。

これまで、成績の低い生徒には、一律に学習時間を増やすよう指導をする場合が多かったが、生徒個々の課題を正確に把握することによって、生徒ごとにアドバイスする内容を変え、個々にあった指導・支援を行うことができた。

20

21

III 教育データ利活用実証事例

<実践事例⑦>

教育ダッシュボードで生徒の課題取組状況等の学習履歴データを参考にして、生徒一人ひとりに合った学習支援の方法を検討・実践した。

<実践内容>

Teams課題機能で課題を配信し生徒に提出させるようにすることで、教育ダッシュボードで生徒一人一人の課題への取組状況をリアルタイムに閲覧することが可能になる。

これにより、教員が生徒個々の課題の取組状況を確認・把握し、進捗の遅れている生徒には早期の声掛けやサポートを行い、逆に進捗が早い生徒には次の課題にチャレンジするよう促すなど、個々の状況に応じた個別最適な支援や声掛けを実施した。

【特定の生徒の課題提出状況】

生徒ID :

課題名	講座名	作成日時	提出期限	ステータス	提出日時	課題提出率
情報 I (18R)	情報 I (18R)	2024/12/20 11:40:05	2024/12/21 23:59:59	提出済み	2024/12/21 16:54:41	92.68%
情報 I (18R)	情報 I (18R)	2024/12/20 11:14:34	2024/12/21 23:59:59	提出済み	2024/12/21 16:57:42	90.24%
論理・表現 I (18R)	論理・表現 I (18R)	2024/12/23 9:41:11	2025/01/15 23:59:59	提出済み	2024/12/23 10:09:55	75.00%
地学基礎 (18R)	地学基礎 (18R)	2024/12/17 7:48:15	2025/01/07 23:59:59	提出済み	2024/12/26 14:53:26	92.68%
公共 (18R)	公共 (18R)	2024/12/24 13:38:41	2025/01/14 23:59:59	提出済み	2025/01/03 18:13:13	90.24%
現代の国語 (18R)	現代の国語 (18R)	2025/01/14 12:01:12	2025/01/14 12:30:00	提出済み	2025/01/14 12:17:42	90.24%
美術 I (178R)	美術 I (178R)	2024/12/18 20:43:26	2025/02/12 23:59:59	返却済み	2025/01/20 20:02:17	71.43%
情報 I (18R)	情報 I (18R)	2025/01/31 12:06:26	2025/01/31 13:00:00	返却済み	2025/01/31 12:44:14	100.00%
論理・表現 I (18R)	論理・表現 I (18R)	2025/02/08 13:17:51	2025/02/12 23:59:59	提出済み	2025/02/10 17:57:15	85.00%
情報 I (18R)	情報 I (18R)	2025/02/14 11:07:20	2025/02/14 12:00:00	返却済み	2025/02/14 11:34:11	95.12%
美術 I (178R)	美術 I (178R)	2025/02/13 11:03:09	2025/03/09 23:59:59	提出済み	2025/03/06 12:10:10	59.52%

各課題についてのステータスを一覧で把握し、「未提出」があれば生徒に声掛けを行う。

クラス全体での課題提出率を把握し、個別の声掛けを行うか、全体指導を行うかの参考とする。

【講座全体の課題提出状況】

講座名	課題名	作成日時	提出期限	受講者数	課題対象人数	提出率	取り組み中	提出
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/17 8:01:13	2024/10/23 23:59:00	61	63	7.94%	58	
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/16 8:29:24	2024/10/23 23:59:00	61	63	6.35%	59	
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/15 8:38:06	2024/10/23 23:59:00	61	63	9.52%	57	
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/04 8:13:50	2024/10/23 23:59:00	61	63	11.11%	56	
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/03 14:23:07	2024/10/23 23:59:00	61	63	9.52%	57	
数学 II (2年-R5必修)(CD) R6	数学 II	2024/10/02 12:16:04	2024/10/23 23:59:00	61	63	9.52%	57	

※提出率: 受講生徒の課題提出率  
取組中: 提出はしていないが、課題の操作をしている生徒数

「提出率」と「取り組み中」の数値から、講座全体での取組状況の概況を把握する。

また、課題だけではなく、授業の教材や生徒が自主学習で使用するための資料もTeamsで生徒に共有している。教育ダッシュボードでは、共有しているファイルごとの利用状況も閲覧することができるため、それを分析することで、生徒がどの教材ファイルを多く利用しているかなどを確認することが可能となる。

ファイルの利用回数や利用人数から、どの教材が生徒にとって有益であったかを予測するとともに、生徒個々のファイル利用状況を分析した。

分析結果を踏まえて、生徒にとって有益であった可能性が高い教材について教科内で共有し、他の科目での教材づくりや資料提示の参考にすることで、生徒にとってより理解しやすい教材や資料を作成することにつなげた。

また、ファイルの利用状況から、教材を上手く活用できていないと思われる生徒を把握することで、つまづいている生徒への個別の学習支援につなげることができた。

ファイル名	ファイル種別	作成者	作成日時	生徒数	閲覧数	DL数	編集数	リンク
高次方程式 練習 2 .jpg	画像ファイル	k1019319	2024/06/18 15:18:27	1	0	1	0	
数学 II 複素数と方程式 問題演習① 解答.JPG	その他ファイル	k1019319	2024/06/28 9:09:07	1	0	1	0	
指数関数のグラフ.gps	その他ファイル	k1019319	2024/11/08 14:32:26	14	1	83	0	
対数関数のグラフ.gps	その他ファイル	k1019319	2024/11/21 8:43:18	15	2	61	0	
積分 No.6 (1)「電車は何m進んだか」 裏面解答.jpg	画像ファイル	k1019319	2025/02/20 9:25:00	1	0	1	0	
積分 No.6 (2)「電車は何m進んだか」 裏面解答.jpg	画像ファイル	k1019319	2025/02/20 9:25:00	1	0	1	0	

このファイルは閲覧した生徒数が多く、ダウンロードした回数(DL数)も多いことから有益であった可能性が高い

<本事例の成果>

教育ダッシュボードにより、生徒一人ひとりの課題の取組状況を把握することで、これまで一律に行っていた指導や声掛けを、生徒の状況に合わせた個別最適な指導や声掛けとすることが可能となった。

また、授業の教材や資料等をファイルごとに利用状況を確認・分析することで、どの教材が生徒にとって有益であったか、どの教材に時間をかけている可能性が高いかなどを把握することで、生徒にとってより理解しやすい教材や資料作成の参考にしたり、資料や教材を上手く活用できていない生徒を把握し、生徒への個別の学習支援につなげたりすることが可能となった。

## IV 研究校における取組内容

### 都立八潮高等学校

#### 1 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの授業改善や学校経営の実践

##### (1) 校内体制

副校長、数学科教員、地理歴史・公民科教員、ICTリーダー、デジタルサポーター（ICT支援員）を構成員とした、「教育データ活用プロジェクトチーム」を組織した。

また、数学科、地理歴史・公民科の教科会議で、教育ダッシュボードのデータ分析を基にした指導改善案を検討・実践し、その実践結果をプロジェクトチームで共有・ブラッシュアップした。

##### (2) 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの指導実践を組織的な取組とするための工夫

###### ① 学習履歴の活用について

数学科、地理歴史・公民科では、Teamsを活用した課題配信や資料共有を積極的に行い、課題の提出状況だけでなく、資料の閲覧状況や生徒の操作状況を教科会で分析し、生徒の状況に応じた指導改善案を検討した。

###### ② 学習履歴と校務情報を掛け合わせた活用について

学年会で出欠席の状況、定期考査の素点、Teamsの課題提出状況を確認し、支援が必要な生徒や注視が必要な生徒について定期的に情報共有を行うようにした。

### 都立三鷹中等教育学校

#### 1 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの授業改善や学校経営の実践

##### (1) 校内体制

ICTリーダー2名と、教務部を中心として教育データ活用推進チームを組織し、各種校内研修の計画・実施、教育データ利活用のためのデータ分析を推進した。

また、教科主任会とも連携し、各教科における教育データの活用を推進した。さらに、各教科における分析・活用の事例や成果を教育データ活用推進チームが集約し、全教職員に共有した。

##### (2) 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの指導実践を組織的な取組とするための工夫

###### ① 学習履歴の活用について

教育ダッシュボードで閲覧可能な学習履歴を活用し、生徒一人ひとりに適した学習支援を実践した。個々の生徒が抱えている課題の本質が、教科特有のものなのか、他教科とも関連するものなのかを教育ダッシュボードから得られた情報を基に判断し、教科の枠組みにとらわれずに教科横断的に分析を行った。

また、教科会や学年会で定期考査後や学期終了時に情報共有する機会を設けることで、定期的に生徒への支援方法を見直すことができた。さらに、それらを取りまとめ、職員会議等で共有することで教員間の指導方針の違いを減らすことができた。

###### ② 学習履歴と校務情報を掛け合わせた活用について

生活指導部が集約している配慮事項を含めた生徒の状況や、進路指導部が集約している模擬試験のデータ等、各分掌からの情報をC4thに入力し、情報共有した。

また、学習履歴、評価・評定データ及び授業評価アンケートの結果を教科・科目ごとに分析し、指導方針の改善案を検討した。さらに、定期考査と模擬試験の相関分析や、学校生活の状況（遅刻欠席）と成績の関連を分析し、短期・中期・長期と期間を明確にして指導計画の改を各学年・教科で検討した。

## IV 研究校における取組内容

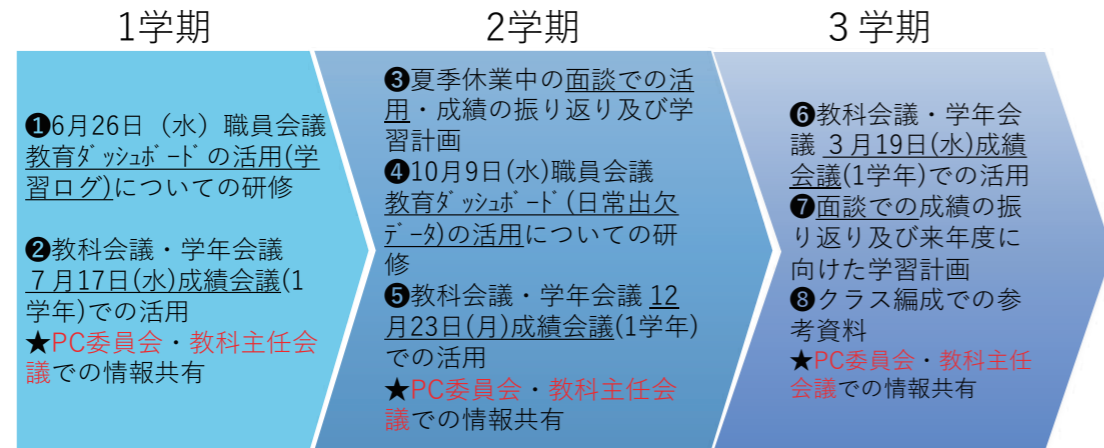
## 都立永山高等学校

## 1 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの授業改善や学校経営の実践

## (1) 校内体制

PC委員会を組織し、担当となった教員がデータを基にした指導改善を実践し、PC委員会及び教科会、教科主任会議にて共有した。

また、職員会議内で年5回研修の場を設定し、全体のスケジュールや活用事例について紹介し校内への普及に努めた。



## (2) 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの指導実践を組織的な取組とするための工夫

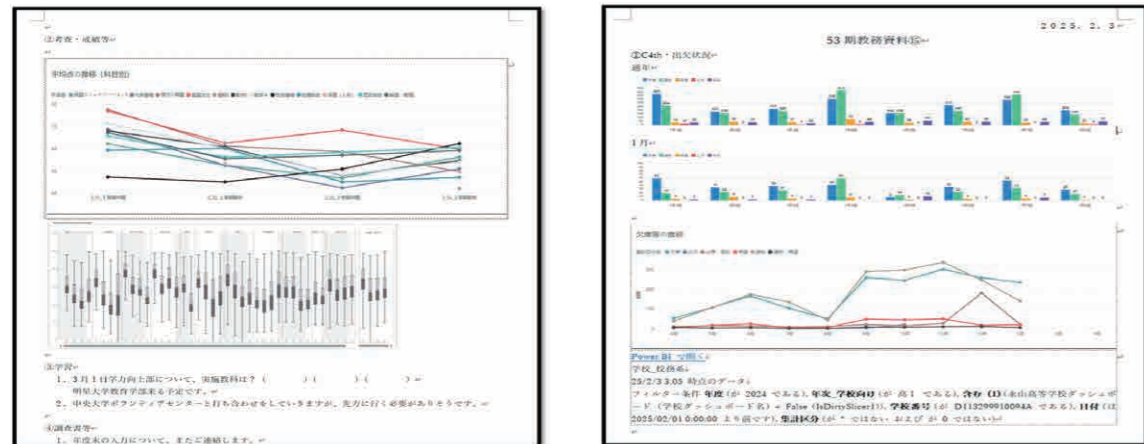
## ① 学習履歴の活用について

Teams課題機能の活用について、職員会議内での研修や長期休業中の教職員向けの講習を設定して、利用推進に努めた。Teamsを活用することで業務負担が増えるのではなく、業務効率化に繋がることを説明した。

また、学習履歴については、教員が分析した結果などを個人面談、三者面談で共有した。

## ② 学習履歴と校務情報を掛け合わせた活用について

職員会議内で実践事例を紹介する機会を設定した他、成績会議前の学年会議で教育ダッシュボードを閲覧して各教科の傾向を把握する時間を設定した。その中で各教員が気付いたことをPC委員会に報告し、PC委員会で集約を行い、職員会議等で共有した。さらに、学習履歴と校務情報を掛け合わせた分析結果の活用については、学年会の資料や面談の参考資料とした。



## 都立日野高等学校

## 1 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの授業改善や学校経営の実践

## (1) 校内体制

令和4・5年度はプロジェクトチームとして、データ活用に関する研究を行った。令和6年度からは、プロジェクトチームを「DX委員会」として位置づけ、昨年度よりも幅広く活動できる校内体制を整えた。学校全体でDXを推進するにあたり、校内研修を含めたDX委員会を月1回以上開催した。

また、デジタルサポーター(ICT支援員)の協力のもと、教員向け資料を作成するなど、教職員のデータ活用に対する意識向上と各システムを活用するためのスキルアップを促す環境づくりを進めた。

## (2) 教育ダッシュボードを活用したエビデンスベースの指導実践を組織的な取組とするための工夫

## ① 学習履歴の活用について

「DX委員会」では、年度当初の職員会議において、「日野高校DX化構想」という資料を配布し、授業におけるTeamsの活用を促し、校内研修でも活用方法について開催した。

学期に1回の授業公開週間では、全教員が「DXを活用した授業」にチャレンジする取組を行った。全ての教科・科目において、毎授業でTeamsの課題機能・成績機能を使うことを推奨し、教育ダッシュボードにデータが蓄積されるように授業を組み立てた。

また、1学期中間考査・2学期末考査の結果を基に悉皆の教科会を開き、定期考査の結果について分析をした。各考査における作問の妥当性を教科内で話し合い、平均点の均一化・作問の具体的な改善案の作成を行い、来年度に向けて作問の方針を固めることができた。

## ② 学習履歴と校務情報を掛け合わせた活用について

令和4年度から統合型校務支援システム(C4th)、定期考査採点・分析システム(リアテンドント)、統合型学習支援サービス(O365)の活用推進を行っている。定期考査採点・分析システム(リアテンドント)は3年間の活用推進の効果もあり、85%以上の教員が考査時に利用するようになり、採点結果と教育ダッシュボードのデータとのクロス分析が可能となった。

学期ごとにTeamsの活用方法及び教育ダッシュボードについての校内研修を開催し、Teamsを活用した課題の出し方、提出結果の集約方法及びTeamsの成績機能や、教育ダッシュボードの閲覧方法等について情報共有した。

また、1学期中間考査・2学期末考査後の教科会(悉皆)では、教育ダッシュボードを主体としたデータ分析を行った。課題の取組状況、考査の素点及び評定等あらゆるデータを掛け合わせたクロス分析を行うことで、データを基にした指導改善案の検討を実施することができた。